

英語絵本の中の日本像

—異文化理解とカルチュラル・オーセンティシティの観点から—

Images of Japan in English Picture Books

—From the Perspective of Intercultural Education and Cultural Authenticity—

印田 佐知子
Sachiko INDA

Keywords : intercultural education, picture books, Japanese culture, cultural authenticity

キーワード : 異文化理解、絵本、日本文化、カルチュラル・オーセンティシティ

1. はじめに

グローバル化と多文化社会の到来とともに、子供たちへの異文化理解教育の必要性が唱えられるようになった。世界のどこに住もうとも、人権の尊厳を守り、人格の多様性を尊重し、多文化共生や異文化理解に寛容な人間を育成することが重要視されるようになった。その一環として、異文化が描かれている絵本を子供たちに読み聞かせる活動も活発化してきている。子供たちが文化の多様性を知るうえで絵本が担える役目は大きい。岩野（1997）の言うように、絵本は「異文化に対するイメージを視覚的に膨らませ、文学的あるいは芸術的にメッセージを伝え、異文化の精神的価値観をシンボル化して、ある種の感動とともに理解させる可能性を持っている」。昔話を題材にした絵本にしる、創作絵本にしる、そこには人々の暮らし、思考や行動パターン、生き方や価値観などが描かれており、読者はそれを真実のひとつとして受け取る。そこで、異文化を題材にした絵本や児童書子供たちに読む際に、それが本当にその文化の真実を表現したものなのかを問いかける必要がある。さらに教育者として重要なのは、どの本を選択するかということである。Marantz（1994）によれば、異文化理解のために絵本を選択する条件は、文化の「オーセンティシティ（authenticity = 真正）」である。つまり、特定の文化がどれだけネイティブの視点からの真正をもって表現されているかということである。描かれている異文化がオーセンティックなものかどうか、登場人物がステレオタイプ化されていないかどうか注意する必要がある。なぜなら、本の中で描かれる世界が子供たちの理解や価値観を形成し、間違った理解や偏見・差別を生む可能性があるからである。

多民族、多文化の社会をもつアメリカやイギリスでは、社会に共存するさまざまな文化的背景をもつ子供たちにお互いの文化を理解させる手だてのひとつとして長らく絵本が用いられて

いる。よって、絵本におけるカルチュラル・オーセンティシティに関する議論と研究も主に英語圏で行われてきており、日本でこの分野が注目を浴びたことはこれまでにあまりない。では、英語圏の国々で読まれている日本を題材にした絵本の中で、日本文化は正しく描かれているのだろうか。子供たちに日本文化は正しく理解されているのだろうか。日本人作家が書いた絵本は海外で多く翻訳・出版されているが、翻訳ではなく、外国人作家が日本について描いた絵本も出版されている。本研究では、英語圏の作家によって書かれた日本についての絵本・児童書に焦点を当て、日本文化がどのように描かれているのか、その傾向と特徴を探ろうと試みた。

2. 異文化理解のための絵本

2.1 カルチュラル・オーセンティシティ

異文化理解教育のために絵本が活用されるようになると同時に、絵本の中で描かれている文化がどれほどオーセンティックなものなのか、つまりどれほどその文化の歴史、伝統、習慣、言語、思想、生活、登場人物が忠実に描写されているかが主に多文化社会のアメリカで問われるようになった。特に、白人によって描かれた有色人種の文化が間違った理解やイメージや偏見を生んでいるとして、さまざまな立場から議論が交わされるようになった。しかし、何ををもってしてオーセンティックだと判断するのか、その定義や考え方は、本の著者、イラストレーター、編集者、出版社、教育者、図書館学芸員、研究者の社会文化的背景や思想に応じてさまざまに異なる。そのため、ひとつの定義として括ることは困難として Bishop (2003) は、カルチュラル・オーセンティシティとは何かを定義づけることは不可能だが、その文化の中で育った読者、つまりその文化のインサイダーが本を「読めばわかる」ものだ述べている。Howard (1991) も同様に、描かれている文化が「本当」のものだとわかるのは、当該文化の読者が「そう、そのとおり」だと心の奥で感じるからだと述べている。本研究では、この立場に則って筆者自身が日本文化のインサイダーの一人として、日本をテーマに書かれた絵本の内容分析を行った。Smolkin & Suina (2003) は、文化というものはモノリス（一枚岩）ではないため、ある文化がオーセンティックに描かれているかどうかの最終判断を下すことは誰もできないと述べている。確かにひとつの文化の中にも多様性はあるが、描かれている特定の文化の価値観や事実、登場人物の取る行動を、その文化で育った読者が受け入れられるのであればオーセンティックだと判断できるといえよう。

しかし、ある本に描かれている文化が「本当」のものかを判断できるのがインサイダーのみであるとしたら、その文化に属さない外部者＝アウトサイダーが文化的にオーセンティックな本を書くことは可能なのかという疑問が湧いてくる。このインサイダー／アウトサイダーの区別はおそらくカルチュラル・オーセンティシティの分野において最も頻繁に、そして絶えることなく議論されてきた課題である。この問いは、両者の立場からそれぞれの主張を伴ってさまざまに答えられてきた。この議論について次項で述べていく。

2.2 作家の社会的責任と創作の自由

カルチュラル・オーセンティシティの重要性が唱えられていることに対して、多くの児童書の作家は、表現の自由に反するものだと述べている。作家のLasky (2003) は、これは検閲の一種であり、作家の執筆の自由を奪うものだと主張している。Laskyのように、作家が想像力を膨らませて力強い作品を作りあげていく自由が損なわれると感じている作家は多い。それに対してHarris (1993) は、問われるべきことは表現の自由ではなく、批判的な眼に晒されることなく異文化を自由に描くことを求める作家の高慢さであると反論している。一方、インサイダー／アウトサイダー議論の単純な二極化に疑問を呈しているGates (2003) は、作家の個人的・社会的な背景によって何を書きたいと思うか、実際に何が書けるかは異なってくると述べている。しかし、あらゆる文化は、その文化を思慮深く慎重に理解し学ぼうとする者に対して門戸を開くとGatesは主張している。こうしたインサイダー／アウトサイダー議論を受けて、これらの議論の本題は作家の社会的責任であるとTaxel (2003) は述べている。作家がインサイダーであれアウトサイダーであれ、ある特定の文化に関連する登場人物や設定について描く際には、慎重に思慮深く描く社会的・芸術的な責任があると主張している。同様に、Rosenblatt (2002) も、作家の社会的責任は表現の自由と対峙するものではなく、作家は書く自由を必要とすると同時に、作品は社会的影響を与えるものとして批評される必要があると述べている。筆者も同様に、著者もイラストレーターも正しい情報とオーセンティックなイラストを読者に提供しているのか、自ら確認する責任があると考ええる。

では、アウトサイダーの著者とイラストレーターの場合、どのようにしてその責任を果たすべきだろうか。あるいはその責任を果たすことは可能なのだろうか。実際、自分の経験したことのない文化について描き、その文化的ギャップをうまく乗り越えて描くことに成功している作家も存在する。よって、インサイダーしかある特定の文化について描くことができないと断言することはできない。しかし、多くの研究者が述べるように、アウトサイダーが異文化について描けるほどの経験を積むことは難しく、描くためには相当の努力が必要だといえる。Reese & Caldwell-Wood (1995) によると、白人作家がネイティブ・アメリカンの人々を題材に描く際、多くの場合は綿密な調査もせず、また部族の人たちと長時間を共に過ごすこともせず、自分たちの主観的な理解と認識に基づいて描く。その結果、ネイティブ・アメリカンの人々を英雄的・神秘的に描くことが多くなり、実在の人々として彼らの気持ちや生活がオーセンティックに描かれることは稀だという。異文化について描くことに成功している作家は、その文化に何年も身を置いてさまざまな実体験を積み、注意深く徹底した調査を行っている。成功している作家の一人Moreillon (2003) は、一方、異文化について描く際にはあらゆる情報源にあたり、インサイダーの人たちに作品を読んでもらって意見をもらい、イラストレーターにはインサイダーを起用すると述べている。異文化を描く際にはこうした努力と工夫が不可欠となる。

3. 先行研究と研究方法

では、日本文化はアウトサイダーの作家たちによってどのように描かれているのだろうか。昨今、英語教育の低年齢化とともに絵本を活用した英語指導が活発化してきている。英語絵本の使用は「言語面でコミュニケーション能力の養成につながることは言うまでもなく、その他にも異文化理解や、さらには人間の教育といった側面においても効果が期待できる」(白須、2004)からであろう。こうした英語力育成や英語圏の文化紹介を目的とした英語絵本の研究や事例は数多く報告されている。しかし、逆に日本文化が英語絵本の中でどのように描かれているのか、つまり日本人から見て不自然な描かれ方をしていないか、カルチュラル・オーセンティシティの観点から考察した研究は見当たらない。岩野(1997)は、Marantz(1994)がカルチュラル・オーセンティシティの観点から子供たちに読ませたい英語の絵本を選定した図書リストの中から、日系アメリカ人に関する絵本4冊を取り上げて内容を考察している。しかし、岩野自身が日系アメリカ人社会のインサイダーではないため、オーセンティシティの評価は行わず、絵本の内容の解説をするにとどまっている。また、乾(1990)は「外国で出版されている日本をテーマにした絵本を見るときに我々日本人を感じる居心地の悪さ」や、「中国と日本の文化を混同したり、西欧から見たステレオタイプ的な日本像に驚き」を感じるとして、その例として1970～80年代に出版された6冊の絵本の挿絵を論文内に掲載している。しかし、それらはあくまでも例としての提示であり、具体的な特徴や傾向を分析したものではない。乾は民俗学の立場から、異文化理解のために絵本を活用することの有効性を述べるとともに、絵本の制作者が民族性や伝統に忠実であろうとする意思を持つべきだと述べている。

一方、カルチュラル・オーセンティシティの分野において先進国といえるアメリカでは、過去30年ほどの間にさまざまな研究の成果が見られている。Harada(1995)によれば、1976年にアメリカのCouncil of Interracial Books for Childrenが「いかに児童書がアジア系アメリカ人のイメージをゆがめているか」という研究を行ったところ、1945-76年に出版された絵本24冊のうち、22冊において人種、性、教育における偏見が描かれており、深刻なステレオタイプの問題があることがわかった。この研究の追跡調査をHaradaが1994年に行ったところ、90%の作品において非ステレオタイプ的な人物描写がなされており、70%の作品において人物以外の文化的な描写が正しく行われていたとして、絵本におけるカルチュラル・オーセンティシティの大きな改善が約20年の間に見られたことが報告された。ここでもカルチュラル・オーセンティシティの定義の問題や一文化の中の多様性の問題はあるものの、20年間に唱えられてきた児童文学におけるカルチュラル・オーセンティシティの重要性が、作家や制作者側にも認められ、実際に多くの改善をもたらしたことは確かである。では、アジア系アメリカ人の文化に限らず、日本文化は英語圏の国々で正しく描かれているのだろうか。それを探る第一歩として、本研究を位置づけたい。

本研究の内容と方法を説明する。2009年、国立国会図書館国際子ども図書館にて世界各国の作家によって書かれた日本をテーマとした絵本を紹介する小展示「エキゾチック・ジャパン—

日本人が知らない、日本を扱った世界の児童書」が行われた。日本人ならば違和感を感じずにはいられない物語や挿絵などが載っている世界の児童書およそ50冊が展示された。こうした絵本等が一同に集められ公開されたことは珍しく、非常に貴重な機会であった。本研究では、その時に展示された絵本・児童書の中からアメリカ・イギリスの英語圏で1990年以降に出版されたものを抽出し、カルチュラル・オーセンティシティの観点から日本文化がどのように描かれているかを筆者がインサイダーの立場から検証した。内容分析を行った13冊の内容は、1) 日本民話、神話、古典が4冊、2) 日本を舞台にした創作が5冊、3) 日本を紹介する児童書が4冊である。それぞれの物語、登場人物とそれ以外の絵から、その傾向と特徴を捉えようとした。次項では、インサイダーとして気になった点をそれぞれに述べ、最後にまとめを記したい。

4. 内容と分析

4.1 日本民話・神話・古典

Belching hill [げっぷ山] (Hamilton, 1997) アメリカ

ラファディオ・ハーンが創作したと考えられている *The old woman who lost her dumpling* (団子をなくしたお婆さん) の翻案と書かれており大筋は原作と変わらないが、日本の代表的な民話だと誤解される可能性は高い。お婆さんは着物姿で描かれているが、鬼は日本の鬼とは姿かたちが異なり、魔法のしゃもじが西洋風のスプーンとして描かれている。

The crane wife [鶴妻] (Bodkin, 2002) アメリカ

「鶴の恩返し」の類話。傷ついた鶴を助けた貧乏な帆船職人のオサムのもとにユキコと名乗る美しい女性が来て一緒に暮らす。生活を支えるためにユキコは船の帆布を織るが、オサムに覗かれ鶴となって空へ帰っていく。オサムは浮世絵風の顔や姿、ユキコは花魁風の髪型で高下駄を履いている。

Folk tales of Japan [日本民話] (Hatherley, 1993) イギリス

「ぶんぶく茶釜」「やまのおろち」「因幡の白兎」「浦島太郎」が収録されている。登場人物の服装はすべて江戸時代の浮世絵風。茶釜は西洋風のカラフルなティーポットでたぬきは白黒のアナグマ。スサノオノミコトは歌舞伎の助六に瓜二つで、竜宮城の乙姫は「ミズノエ」姫と呼ばれ花魁風に描かれている。

The girl who loved caterpillars: a twelfth-century tale from Japan [芋虫が大好きな女の子：12世紀の日本のお話] (Merrill, 1992) アメリカ

平安末期の小説集「堤中納言物語」の中にある「虫愛づる姫君」を元にしているようだが、

姫君の名前はイズミと現代風。表紙のイズミは長襦袢の上に帯をしてその上に着物を羽織った姿。絵を見る限り時代は江戸時代、イズミのために虫を探す子供たちは中国人風、イズミに歌を贈る中将らしき若者は町人風の出で立ちとなっている。

4.2 日本を舞台にした創作

Jiro's pearl [次郎の真珠] (Powers, 2002) イギリス

主人公のジロウは病気の祖母のために薬をもらいに行くが途中で道草をして失敗をする。心を入れ替えて「ヤクザイシサン」の言いつけを守り薬を手に入れようと奮闘する。蛙が花魁風の美女に変身して辺りにジャスミンの香りが立ちこめたり、箆筒の中から出てくる宝物の中にはお祭り用の法被や「月桂冠」と書かれた酒瓶が入っている。

One leaf rides the wind: counting in a Japanese garden [風に乗る一枚の葉：日本庭園で数える] (Mannis, 2002) アメリカ

日本庭園をテーマにした数字の数え方の本。ひとつの庭にお寺で見られる五重の塔と、神社で見られる狛犬の像両方が置かれている。暗い夜の庭を照らす無数の灯籠や、庭の中に置かれている盆栽など、日本人にとっては違和感を覚える絵が描かれている。主人公の女の子はおかっぱ頭に着物姿で、目は細くつり上がっている。

Shibumi and the kitemaker [渋味と凧職人] (Mayer, 2003) アメリカ

「渋味」は天皇の一人娘の名前。著者が日本を訪れた際に覚えた日本語でその意味と響きが気に入ったと書かれている。お城の高い塀に囲まれて育った渋味は、ある日外の世界の貧しさを見て驚き、凧職人に自分が乗れる凧を作ってもらい外の世界を変えようと試みる。渋味はおかっぱ頭に花魁風着物姿、天皇の家来たちは鎧兜姿、お城の庭には鳥居や仏像が置かれ鶴が飛んでいる。建物の壁には中国風の雷文文様、床石には桜の絵が描かれている。天皇が亡くなる場面では着物を来た天使たちが迎えに現れる。

Sky sweeper [空を掃く人] (Gershator, 2007) アメリカ

主人公はお寺の庭師「タケボキ」。著者は竹箒という言葉からその名前をつけたと巻末に書かれている。タケボキは若い頃からお寺の庭の手入れをし、結婚もせず旅にも出ず、年老いて死ぬまで毎日庭の手入れを続ける。死後、タケボキは空の上に昇ってもやはり竹箒を持って空を掃く。誰にも認められなくても自分の仕事を愛して続ける喜びが描かれている。タケボキはやはり細いつり上がった目をしている。

Wabi-sabi [侘び寂び] (Reibstein, 2008) アメリカ

ワビサビは猫の名前。時代設定は現代だが京都に住む猫の飼い主の女性は着物を着てい

る。アラブ諸国と思しき外国から客が訪れ、ワビサビの意味は何かと訊ねられる。答えることができないワビサビは自分の名前の意味を訊ねて歩く小さな旅に出る。著者は仏教と禅の考え方に基づく「侘び寂び」という概念に惹かれたと書いている。本を通じて説明しようとしているようだが抽象的で読者に伝わるのは難しいと思われる。

4.3 日本を紹介する児童書

Japan [日本] (Bornoff, 1999) イギリス

日本在住11年のベテラン記者という著者が、日本の都市と田舎の代表として岡崎市と奈良井を写真と文で紹介している。1999年に出版されたにも拘らず、日本人の生活は豊の上、近年まで家にお風呂がなくて銭湯通いだった、食後の片づけは母親と娘が行い息子はゲームをしている、母親が風呂の支度をして父親の寝間着を出しておく、祖母は洋食を食べないといった描写がされている。

Japan [日本] (Haslam & Doran, 1995) イギリス

世界各国の歴史と文化を紹介する Make it work! シリーズの一冊。小学生の子供たちが実際に日本のものを作ったり昔の服装を試してみるのだが、紙や紐を使って作られた着物は本物とはかけ離れており、かんざしとして使われているのもプラスチックのお箸。茶道の写真には急須とお湯飲み茶碗、お寿司の写真にはカリフォルニアロールが写っている。

Japan [日本] (Pluckrose, 1998) アメリカ

東京に残っている古い街並の紹介として谷中の吉田屋本店が出ているが、歴史的建造物ではなく、今も人が住んでいる普通の家であるかのように紹介されている。日本人の主食として紹介されているお米の写真には細長くて茶色いインディカ米、家に帰ったら玄関で脱ぐという履き物の写真には旅館らしき印が入っている下駄が並べられている。

Japan: its festivals and traditions [日本：祭りと伝統] (Dawson, 1998) アメリカ

世界各国のお祭りと伝統を紹介するシリーズの一冊。お正月の門松には「招福飾り」と書かれた旗が刺してあり、節分のお面には鬼とおかめのお面、鯉のぼりは赤・青・緑の紙人形風、お盆の時には雷門のちょうちんを下げる、七五三のお祝いは男の子は3歳と5歳など、著者の知識不足が端々に表れている。

4.4 まとめ

まず、日本民話・神話・古典の4冊は、ハーン原作の *Belching hill* 以外は日本の民話や古典として知られている作品である。The crane wifeのように物語の一部が改変されているものがあるものの、大筋は原作をほぼ踏襲している。しかし、日本人としては違和感を感じる点がい

くつかある。一つ目は、原作ではついていないオサム、ユキコ、イズミなどの現代的な名前が登場人物につけられている点である（木下順二の戯曲「夕鶴」では与ひょうとつうという名前が与えられていたが、本来の「鶴の恩返し」では名前はつけられていない）。これは英語の言語的な性質上、主人公に名前もつけずに「男」や「姫」を主語として文章に繰り返し用いることへの違和感からつけられたのではないかと推測する。このような場合、勝手に名前をつけてはいけないということとはできないが、時代背景に適した名前を選ぶことは可能かと思われる。二つ目は、挿絵の人物、衣服、小物等が十分な考証がされないまま描写されている点である。部分的に西洋風であったり中国風であったりという混同が見られるほか、平安時代の物語であるのに挿絵は江戸時代風であるといった時代錯誤が見られる。また、古き日本というと江戸時代の浮世絵の印象が強いのか、男性は浮世絵風、女性は花魁風の容姿で描かれていることが多い。

日本を舞台にした創作絵本5冊は、いずれも作家が自由に創造した物語である。その中で日本人ならばおそらく誰もが気になる点は次のとおりである。まずは、渋味、タケボキ（竹筍）、ワビサビといった主人公たちの名前である。読んでみると、Shibumi and the kitemakerの作者は日本を訪れた際に知った「渋味」という言葉のイメージを自分で解釈して物語を作ったことがわかる。同様に、Sky sweeperの作者は自分の受けた日本庭園と仏教・禅のイメージから物語を作っているし、Wabi-sabiの作者も西洋にはない「侘び寂び」という概念を解釈して創作している。One leaf rides the windも日本庭園という西洋にはない世界を描こうと創作していることがわかる。このように創作絵本の場合、作者の異文化に対する思いや解釈に基づいて自由に描かれており、作者の文化にはないいわばエキゾチックな要素に惹かれて創作意欲が刺激されているという印象を受ける。しかし、取り上げているテーマに対する理解が不十分であり、挿絵を見ても、神社とお寺の混同、庭に鳥居や仏像、女性は花魁風着物姿で天皇の家来は鎧兜姿、お城に中国風文様などさまざまな誤解や混同が見られる。また、女の子はおかっぱ頭、男女ともに目は細いつり目などステレオタイプの描かれ方をしている。

そして、日本を紹介する児童書4冊においても、作者の知識や考証不足を感じずにはいられない。挿絵よりも写真が多く使われているにもかかわらず、日本の伝統行事、生活習慣、食べ物、衣服などの紹介において間違っただ情報やイメージを読者に与えている。また、日本の都市部の家庭でも皆畳の上で暮らしているかのような描写や男尊女卑社会であるかのような描写を見ると、実在する日本人家庭の生活が紹介されていても、作者がどのような点を取り上げるかによって読者に与えるイメージは大きく異なることがわかる。創作絵本に限らず、紹介本においても、作者たちが日本をエキゾチックな文化として描こうとしている傾向が読み取れる。

5. おわりに

子供たちに知らない文化についての絵本や児童書を読ませる際、間違っただ知識や印象を植えつけないように教育者は内容が文化的にオーセンティックなものかどうかを確認したうえで手渡してあげたいものである。しかし、先述のように、その文化のアウトサイダーがそれを判断

することは容易ではない。インサイダーであっても同じ文化に存在する多様性を鑑みると何がオーセンティックだといえるのかという課題は残る。しかし、今回、実際にアウトサイダーによって描かれた日本を題材とした絵本・児童書13冊を考察したところ、おそらく大多数の日本人が同意すると思われる間違いや誤解が描かれていた。Bishopが述べたように、オーセンティックに描かれているかどうかは、その文化の中で育った読者、つまりその文化のインサイダーが本を読んだ際に「見ればわかる」ものだということを筆者自身が実感した。1990年以降に出版された日本民話・古典、日本を舞台にした創作、日本を紹介する児童書を含む13冊の中には、画一的な髪型・衣服・容姿の描き方、物語と挿絵や登場人物の名前と時代の不一致、日本と中国の文化の混同、伝統行事や生活習慣等に対する知識・考証不足、エキゾチックに描こうとする傾向等が明らかに見てとれた。それを鑑みると、これらの絵本が本当に異文化理解のために役立っているのだろうかという疑問に思わざるを得ない。ただし、これらの絵本や児童書の全てが間違っているというわけではなく、日本文化の一部は確かに伝えているわけであり、その価値は認めるべきだろう。しかし、より正確であるに越したことはない。それには、やはり作家が異文化を描く際には異文化に身を置いて経験を積み、徹底した調査を行う努力が求められる。あるいは、Moreillonのようにあらゆる情報源にあたり、インサイダーに意見をもらい、インサイダーのイラストレーターを起用するといった工夫が必要になろう。それに加え、異文化理解教育に携わる者や民俗学者など多くの関係者が学会等でカルチュラル・オーセンティシティーの重要性を伝え、信頼できる絵本が数多く提供されるようになるよう期待する。なお、本研究では、世界で出版されている日本を題材にした絵本・児童書すべてを検証したわけではなく、英語圏で出版されたごく限られた冊数を検証するにとどまった。よって、さらに多種多数の本を当たらずには全体的な特徴と傾向を述べるには不十分であり、これからの研究課題でもある。現段階で断言できることは、絵本・児童書を通して異文化理解を行う場合、特定の文化についての本一冊を読むにとどまらず、数多くの本に触れることが大事だということである。

【参考文献】

- Bishop, R. (2003) Reframing the debate about cultural authenticity. In Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.). *Stories matter: the complexity of cultural authenticity in children's literature*. Urbana: National Council of Teachers of English.
- Gates, H. (2003). "Authenticity" or the lesson of little tree. In Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.). *Stories matter: the complexity of cultural authenticity in children's literature*. Urbana: National Council of Teachers of English.
- Harada, H. (1995). Issues of ethnicity, authenticity, and quality of Asian-American picture books, 1983-93. *Journal of Youth Services in Libraries* (pp.135-49).
- Harris, J. (Ed.) (1993). *Teaching multicultural literature in grades K-8*. Norwood: Christopher-Gordon.
- Howard, F. (1991). Authentic multicultural literature for children: an author's perspective. In Lindgren, V. (Ed.), *The multicolored mirror: cultural substance in literature for children and*

- young adults* (pp. 91-99). Fort Atkinson: Highsmith.
- 乾 淑子 (1990) 「絵本による異文化理解」『北海道東海大学紀要人文社会科学系』第3号、41-54頁、北海道東海大学
- 岩野雅子 (1997) 「ビジュアル・リタラシーとカルチュラル・リタラシー：絵本に読む日系アメリカ人のアイデンティティー—異文化理解の一例として—」『山口県立大学国際文化学部紀要』第3号、49-58頁、山口県立大学
- 国際子ども図書館 (2009) 「エキゾチック・ジャパン—日本人が知らない、日本を扱った世界の児童書」2013年8月6日 <http://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/pdf/exoticjapan.pdf> より情報取得
- Lasky, K. (2003). To Stingo with love: an author's perspective on writing outside one's culture. In Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.). *Stories matter: the complexity of cultural authenticity in children's literature*. Urbana: National Council of Teachers of English.
- Marantz, S. & Marantz, K. (1994). *Multicultural picture books: art for understanding others*. Linworth Publishing Inc.
- Moreillon, J. (2003). The candle and the mirror: one author's journey as an outsider. In Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.). *Stories matter: the complexity of cultural authenticity in children's literature*. Urbana: National Council of Teachers of English.
- Reese, D. & Caldwell-Wood, N. (1997). Native Americans in children's literature. In Harris, J. (Ed.), *Using multiethnic literature in the K-8 classroom* (pp. 155-87), Norwood: Christopher-Gordon.
- Rosenblatt, M. (2002). A pragmatist theoretician looks at research: Implications and questions calling for answers. Miami: Special Research Session, National Reading Conference.
- 白須康子 (2004) 「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」『人文研究：神奈川大学人文学会誌』第154号、83-111頁、神奈川大学
- Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.) (2003). *Stories matter: the complexity of cultural authenticity in children's literature*. Urbana: National Council of Teachers of English.
- Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.) (2003). The complexity of cultural authenticity in children's literature: why the debates really matter. In Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.). *Stories matter: the complexity of cultural authenticity in children's literature*. Urbana: National Council of Teachers of English.
- Smolkin, B. & Suina, H. (2003). Artistic triumph or multicultural failure? Multiple perspectives on a "multicultural" award-winning book. In Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.). *Stories matter: the complexity of cultural authenticity in children's literature*. Urbana: National Council of Teachers of English.
- Taxel, J. (2003). Multicultural literature and the politics of reaction. In Short, K.G. & Fox, D.L. (Ed.). *Stories matter: the complexity of cultural authenticity in children's literature*. Urbana: National Council of Teachers of English.
- Yokota, J. (1993). Issues in selecting multicultural children's literature. *Language Arts*, 70, (pp. 156-66).

[絵本・児童書]

- Bodkin, O. (2002). *The crane wife*. Orlando, Harcourt.
- Bornoff, N. (1999). *Japan*. Sussex, Wayland Publishers.
- Dawson, S. (1998). *Japan: its festivals and traditions*. New York, Franklin Watts.
- Gershator, P. (2007). *Sky sweeper*. New York, Farrar, Straus and Giroux.
- Hamilton, M. (1997). *Belching hill*. New York, Greenwillow Books.
- Haslam, A. & Doran, C. (1995). *Japan*. London, Two-Can Pub.
- Hatherley, S. (1993). *Folk tales of Japan*. London, Evans.
- Merrill, J. (1992). *The girl who loved caterpillars: a twelfth-century tale from Japan*. New York, Philomel Books.

- Mannis, C.D. (2002). *One leaf rides the wind: counting in a Japanese garden*. New York, Viking.
- Mayer, M. (2003). *Shibumi and the kitemaker*. New York, Marshall Cavendish.
- Pluckrose, H. (1998). *Japan*. New York, Franklin Watts.
- Powers, D. (1997). *Jiro's pearl*. London, Walker Books.
- Reibstein, M. (2008). *Wabi-sabi*. New York, Little, Brown and Co.

(平成25年11月6日受理)